Ⅱ－7　アジア・アフリカの諸文化と日本文化

（議長　芳賀　徹）

米山俊直

発表者　米山俊直

(1) アフリカと日本の比較

アフリカ大陸は日本のおよそ八十倍の面積で、赤道を中心に南北に広がる大陸である。その人口約五億五千五百万人、伝統的な生活様式には狩猟採集、漁撈、農耕、牧畜、さらに都市的生活と、人類史のほとんどすべての様式を含んでいる。

しかし、この大陸はユーラシア大陸に隣接していて、中東やヨーロッパの影響を強く受けている。なによりも不幸なことは、十七世紀、十八世紀の奴隷貿易、そして十九世紀、二十世紀にわたる植民地時代という、しいたげられた歴史を持っていることである。第二次世界大戦のあと一九六〇年前後に、民族の自決を基盤とする国家があいついで誕生し、一九七〇年代になってポルトガルの植民地であったモザンビークとアンゴラが独立し、さらにジンバブエも白人独裁の体制から脱して、ナミビアも独立への道をたどることになって、なお南アフリカの白人支配が続いているものの、いちおう周辺の諸島を含めて五十一の独立国を擁する地域となっている。

日本の歴史はもっとも古く逆上っても、一万年前まではとても及ばない。歴史のわかっているのは、せいぜい一五〇〇年、それ以上の過去は考古学的な事実にたよるほかない。それに比べると、アフリカ大陸は、エジプトの五千年の文明の歴史が明白であるうえに、オーストラロピテクスの一万年前までの人類史のすべてを擁している。

これでは比較にならないではないか、という向きには御心配なくと言おう。アフリカ大陸は、なお国民国家を夢見る人々のために、政争があいつぎ、一九六〇年以降、クーデターの連続である。それにくらべると、「万世一系」の日本は、そのことを誇りにしてよいであろう。アフリカにもエチオピアのハイレセラシェ皇帝の存在があったが、その啓蒙的な政策は、かえって一九七四年に軍のクーデターによって自分の地位を失わせてしまう結果となってしまった。南アフリカにはスワジランドとレソトという王国が独立国として国際的に承認されているが、人口はそれぞれ七十一万人、百六十二万人という小国であるから、一億二千万人を擁する日本と直接比較することはできない。

(2) 日本文化の最大の特色

そこで、日本は何を誇りにできるかということを、もう一度検討してみよう。天皇制もその一つであろうが、もっと誇りにできるものがある。それは精霊信仰あるいはアニミズムと呼ばれている信仰形態である。八百万の神々という、風の神、雷の神、水の神、山の神、海の神、舟の神、土の神、火の神、金の神、日の神、月の神、などなど、日本人は多くの神々に護られて生きていると思っている。これこそが日本文化の最大の特色である、と言ってよいだろう。

つぎに挙げてよいのは、日本人の祖先崇拝ということである。

ひとりひとりの個人がその自我を自覚したときに、自分の存在は母親という存在が無くては有りえない、ということを悟る。そして、すこしでも生物学を学んだ人であれば、さらに父親がなければ自分の存在がない、ということを知るだろう。祖霊信仰というべきものが、日本の古くからの文化伝統として存在しているのである。

さらに第三の信仰形態として、いわゆる御霊信仰がある。これは平安時代に政治的に失脚して朝廷を追放された人々の怨霊を慰めるために祀ったとされていて、その典型として菅原道真が天神として祀られているが、じつはこの呪術的な信仰は古くは疫病や雷、洪水などをたたりとしておそれた信仰に由来しているとされ、それはもっぱら京都のような早くから集住がはじまったところ、つまり都市に起源を持っているといってよい。

このような精霊信仰、祖霊信仰、および御霊信仰の三つは、大陸から渡来してきた仏教、儒教、道教の影響を受けて、それに対抗するような形で発達を見せ、いわゆる土着の信仰である神道としてしだいに発達し、江戸時代には習合的な性格をもつ宗教となるが、明治初年の神仏分離令によって、神道の神社と仏教の寺院が明確に分割され、神道は国家の保護を受けていわゆる「国家神道」になってゆき、第二次世界大戦後占領軍の政策によって、それが解体されるまで継続したことは周知の事実である。

今日の日本人の精神生活は、学校教育における徹底した自然科学教育の影響によって、無神論、唯物論的な合理性こそが唯一絶対の真理であるという考えが支配的であり、伝統的な宗教については、慣習、習俗としてしか肯定せず、多くの伝承に対しては半信半疑の懐疑的な態度をとっているといえる。しかし反面で、丙午の年にはあきらかに出生率が低下するとか、あるいは年頭の社寺への初詣には毎年膨大な人口が参加することなど、宗教的な動きは衰退し消滅しているわけではない。新宗教に参加する人口もけっしてすくないとはいえず、オカルトなどに対する関心、超心理学や神秘主義への関心もすくなくない。したがって、近代百年の自然科学教育にもかかわらず、日本人の心性には古くからの精霊信仰、祖霊信仰、御霊信仰が生きているという面がある、といってよいだろう。それは、一神教的な世界に対する多神教的な世界である、といってよい。そのような世界の上に、日本文明——日本文化の上に構築された制度、装置、システムをそう呼ぶとすれば——が存在しているのである。

(3) アフリカの精神世界との類似性——自然神と精霊信仰

じつは、まさにこの日本的心性という点において、日本人はアフリカ人と共通の心性を具えている、といってよいのではないだろうか。まず、自然に対する信仰と精霊信仰の共通性をあげることが出来る。

アフリカ人の心性には、その広大な自然に対する畏敬の観念

が強く、自然の生命力に対する強い信仰があり、また人間そのものもこの生命力によって生かされている、というような考え方が存在する。テンペルはその『バンツー哲学』（一九四五）において、生命力の観念の存在を指摘したが、ガボンのファン人のエヴェル、北コンゴのバンツー人のエリマ、ピグミーのイメグベ、ドゴン人のニャマ、マンデ系諸族のニャマ、ロビ人のケレなどが、デシャンによって紹介されている。（『黒いアフリカの宗教』一九六三）

またドイツ人のヤンハイツ・ヤーンは『ムントゥ』（一九五八）（邦訳『アフリカの魂を求めて』一九七六）において、ントゥntuという概念がバンドゥ語系諸民族にとって重要であることを指摘、ムントゥ（人間、複数バントゥ）、キントゥ（事物、複数ビントゥ）、ハントゥ（時間と空間）、クントゥ（様相）の四範疇を含むという。そして「宇宙はさまざまな生命力の網目から成り立っている。宇宙は諸々の力のフィールドである。男性、女性、犬、石、そして昨日、東、美と笑いさえも――これらはすべて、相互に関連し、不断に作用を及ぼし合っている力である。宇宙は一個の統一体であり、そこではすべて、相互に関連し、そこではそれぞれの部分は他の部分に依存していて、どの部分も一定不変である。もしもあなたがある物の一部を所持すれば、そのことによってあなたはそれの生命力に加わるのであり、もしもあなたが樹木から一枚の葉をひきちぎるとすれば、その樹木はふるえるだけでなく、宇宙全体がそれによって影響を受けるのである。なぜなら何物もそれだけであるのではないからである。ヨーロッパ人にとっては、力は一つの属性である。つまり現存するものは力をもっているのであるが、アフリカ的思考においては力は現存するものなのであり、肉体的、精神的エネルギー、潜在的力なのである。そして、これらすべての生命の力の総体こそは、ントゥなのである。ントゥにおいては、宇宙的な普遍的力は、あらゆる単一な力と結び合っているのである。」と述べている。

私自身が調査した三つの農耕民社会、すなわちタンザニアのイラク人、マリのバンバラ人、ザイールのテンボ人においても、それぞれ認めることができる。

ここではいくつかの例をあげる。たとえばバンバラ人は、世界を活動的な力の塊と理解している。そして人間は犠牲などの方法によって、この力を左右することが出来る。その力を人間がもっているのは、天地創造の秩序のなかで人間の占める地位による。もと世界はフという原始虚空であったが、そこにグラという運動があたえられる。それは「それ自体の無に満ち、また無自体に満ちているもの」である。そのグラが声を出して、倍になり、万物に二元性があたえられる。つぎに四倍になり、ゾ・スマレ（冷たい錆）という湿った物質になり、そして固いかがやく物質になる。それから倍加がつづいて、こうして結晶した物質で世界が充満すると、グラはゾ・ナマイという力を発して、フエ・タスマ（風の火）を創って万物を溶かしてしまう。

その後二分されたグラは動かなくなり「不動の動」になる――というかたちで創生神話はつづく。あたかも禅の言葉を聞いているような理念型がそこには描かれている。

二つの原始の力が精霊ヨから創造される。ひとつは言葉の主ファロである。ファロは七つの点を創り、それは地上の七つの種類の土地に対応する。ファロは空気の精霊テリコを生み、水の姿になって地上に生命を広げた。そして二組の双生児の女児を創った。彼女らは水の最初の住民であるボゾ人を生んだ。もうひとつの力は、四極点を回転するペンバで、山や丘をつくって大地を創造した。そして七年後にペンバはアカシアの種に変わり、地上にやってきて、その化身であるバランゼという木を茂らせた。その動きのあとの地理と唾液がまざって、そこからムッソ・コロニという女性が創造され、それにペンバが魂ニとその影ディアを吹きこみ、彼女とともに植物や動物を創造した。

テンボ人は高地性森林のなかで焼畑耕作をおこなっているが、野生動物についての多くの禁忌をもっている。たとえばフンブリとか、ニジワという名の有蹄類が村のなかを走りぬけると、大凶兆で、村は全体として移動する必要がある、といわれている。またエチャラフンジという小鳥、あるいはチョータという小鳥が家のなかに飛びこむと、その家を捨てなければならない、といわれる。

イラク人は半農半牧民であるが、その世界は太陽女神ロアと悪霊ネタンによってつかさどられていると信じていて、また悪い祖霊ギがこの世の出来事に関与するとして、それらの超自然的存在と人間を媒介するカサルモという呪術師が大きな役割を果たしている。人々はカサルモの指示に従って呪術的儀礼をおこない、それによって生活の行動規範としている。

(4) 祖霊信仰と怨霊信仰――呪術師の役割

つぎに、日本人と共通しているのは、両親や祖父母、曾祖父母をはじめとする祖先に対する態度である。アフリカの諸民族のほとんどの社会が、父系（男系）か母系（女系）、あるいはその組合わさった単系血縁集団組織をもっていて、都市生活者は別にすれば、日常生活の多くがそれらの血縁集団の人間関係のなかで送られている、といっても過言ではない。配偶者の選択も、この集団同士の関係のなかで行われるし、集団成員としての資格や財産の譲渡も、この集団を軸としておこなわれる。一連の礼儀の体系が、人間関係に秩序をあたえている。そして、そのような人間関係の網の目においては、死者はあたかも生者とともにあるように、日常行動にかかわっていて、その行動規範において、さまざまに干渉してくるのである。

死者と生者をつなぐのは呪術師であるが、一般に彼等の地位は高く人々に恐れられている。それは、彼等が日常生活においておこるさまざまな出来事が、精霊、自然神、悪霊、あるいは祖霊によって引きおこされている、と考えているからである。

病気や旱魃のような不幸の原因になる事件は、多くの場合、

祖先の怒りではないか、と考えられている。災厄の原因つまり災因には、祖霊についで、神、あるいは悪霊のたたり、ということも考えられ、また個人的な恨みに原因する呪いという可能性もある。つまり怨霊である。呪術師は、災厄の原因がこれらのどれに由来するかを判断して、その対策、対抗呪術の方法を教え、またその呪術をおこなってやる。それは多くの場合、われわれの社会における医術、医師の診断と治療に似ている。また、彼等はときに裁判官でもある。一般にアフリカの地域社会においては、村落組織などの秩序は長老たちによって維持されていて、成員の反社会的行動に対しては、長老たちが村長を中心に判断して、社会的制裁が与えられるのであるが、精神的、あるいは超自然的な現象については、このような世俗的な組織は無力であり、彼等は呪術師のもとに行ってその判断をあおぐことになる。呪術師はそれぞれ独自の方法を用いて、災厄の原因を特定し、共同体成員の参加による対抗呪術、儀式を行う。誕生、成人式、結婚、葬式などといった個人の人生の通過儀礼にも、呪術師が関与する場合がすくなくない。

このように、日本人の心性とアフリカ人の心性の共通性は、精霊信仰、祖霊信仰、あるいは怨霊信仰の存在にあるといってよいであろう。そして、日本人においては医師や裁判官として分化している役割が、アフリカにおいては呪術師に体現されているといってよいだろう。

(5) 原始心性の残存する日本文化

もっとも、ここでアフリカとの比較として紹介した事例は、そのまま他の地域にも共通性が見出される、という反論も容易に予想される。オーストラリア原住民、カナダのイヌイト、南米アマゾン流域の原住民、ニューギニア、ボルネオなどの原住民の心性も、やはり自然神を崇拝し、精霊、祖霊、怨霊とともに生きる呪術的世界を具えている。またインドや中国の文明の基礎になった心性、あるいは北西ヨーロッパのエッダやサガの心性、さらにはギリシャの神々の世界やヘブライズムの根底にある多神教的世界なども、のちに唯一神によって駆逐されるまでは、人々の心を支配していたことはよく知られている。その意味では、日本人の心性にある原始性は、ただ日本人とアフリカ世界だけが独占しているものではなく、かつては世界各地に存在していたものといってよいだろう。

ただ、多くの地域が一神教の洗礼を受けて思考が単線的になっているのに対して、日本やアフリカはなお原始的な心性を残してきたといえるのである。それは民族の若々しさを示すものであるともいえる。よく二十一世紀は日本の世紀であるといわれるが、私は二十一世紀はアフリカの世紀である、ともいえるのではないかと思っている。現在この大陸をおおっている問題、政治的不安、経済の未発達、教育の未発達などが解決すれば、この大陸には無限の可能性が存在しているといってよい。アフリカには若い人口があふれ、彼等はまさに未来を担おうとして

いるのである。

もっとも、アフリカにはキリスト教、イスラム教が深く浸透している側面があることも見逃せない。その意味では、日本人がもっともよく原始的心性を残存させてきた民族集団であるということが出来るかもしれない。

日本文化には縄文的な世界と弥生的な世界が共存していることは、谷川徹三をはじめとして多くの人々が指摘しているところである。縄文の火焔土器の豪快さと弥生の埴輪の端正さは、日光東照宮と桂離宮、棟方志功と小林古径というように共存して日本文化を形成してきている。その共存が日本文化をディオニソスとアポロの共存する独特の存在にしてきたといってよいだろう。そして日本人の心性にひそむ野生的なものは、すぐれて狩猟採集民的な縄文の伝統であるといってよいだろう。

この伝統がそのまま現代にまで伝えられていることが、いわば明治以来百二十年の近代化過程を経過しながら、なお若々しさを失わない日本文化の特色であるといってよいし、それはアフリカに認められる未来性と共通している部分であると考えたいのである。

以上、日本文化とアフリカ文化を比較して、その共通性を原始心性の残存という点からとらえようとしてみた。御批判を賜りたい。

コメント　**ゴードン・C・ムアンギ**

米山先生の発表は、すごく広いアフリカ大陸に対して島国である日本を比較するという非常に難しい話でありましたが、よくまとめてくださったと思っております。

もう一つは、米山先生の話の中にバンバラの近くにいるドゴンの民族の話が出ましたが、普通はみなさん意識されずに「ドゴン族」という言い方をされますが、米山先生のお話の中では、非常に気をつけて、意識して「族」という言葉を使われなかったということは、非常に私はありがたいと思います。

と言うのは、私は日本に来てから繰り返し繰り返し言ってるんですが、「部族」という単語は非常に差別的だと言っても、わかってくれる人は非常に少ないのです。そういう意味で、米山先生がそういう観点からはっきり言ってくれて、非常によかったと思います。このことはアフリカの理解のために非常に大事な点だと思います。外国でも日本でも、アフリカ人は遅れているというイメージが一般的であるために、アフリカを見る時は必ず部族から入ろうとするのですが、これがアフリカ人にとっては非常にイライラすることですね。

例えば南アフリカを例にとれば、南アフリカの人種隔離政策を支えている白人は、人種差別という時代はもう終わった、だれもアパルトヘイトを続けようと思っている人はいないと言いつつ、アフリカの文化と我々の文化は違うという言い方をします。我々とアフリカ人は基本的な文化が違うんだから、そういう違いを無視することはできないと言う。非常に聞こえはいいんですけれども、では実際にそこで「違い」と言っていることは何かというと、アフリカ人の文化の基本は部

族社会だと言うのです。

ヨハネスブルグの近くにソウェトという黒人居住区があるのですが、そこはスラムみたいなところなんですね。ところが隣にあるヨハネスブルグの白人が住んでいる地域は、世界で一番いいと言われている場所なのです。同じ人間なのに、一方がスラムみたいなところに住みながら、もう一方の白人が豊かなところに住んでいるのはおかしいんじゃないか、と言われる時、アフリカ人の文化は部族社会だという論理が使われるんです。アフリカ人はコミュナリスティックで個人主義ではないんだから、ソウェトみたいな形で大家族が一ヶ所に住むのが普通であるというふうに、そういうふうに話をジャスティファイするわけです。でも、実際はそうではないのです。そういう意味あいで、部族論が南アフリカ、あるいは他のところでもよく使われているのです。このことをまず最初に言わなければなりません。

ただ、こういう話ばかりでは、コメンテーターの役割を果たせませんので、最初に言いましたように、アフリカ大陸と日本を比較することが本当にできるのか、という点をもう少し考えたいと思います。アフリカは大陸ですから、大陸とこういう一つの国を比較すると、何でもあり得るんですね。調べていけばどこかに必ず共通点がある。広いですからね。ですから、一つの民族をピックアップして比較したほうがもっとはっきり比較になったんじゃないかと思います。

例えば、十何年か前にイザヤ・ベンダサンが書いた『ユダヤ人と日本人』という本がありました。本当にはそういう名前の人は存在しないと言われているのですが、ユダヤ人と日本人というふうに比較するなら、なんとなくすっきりというか、納得できるんですね。確かめられるんですよ。本当か本当じゃないかということは調べたらわかる。でも、アフリカ大陸のスケールになると、確かめようもないんじゃないかということを一つ言わなければならないと思います。

ただ、バントゥの話が出ましたので申し上げますと、私はバントゥ人ではなくキクユ民族の者ですが、どっちかと言えば、キクユと日本は比較できるというふうに思います。まず一つは、ともに農耕民族であるということ。文化というものは、私の見方だけかもしれませんが、環境でつくられたものですから、農耕民族の文化と牧畜、あるいはサハラ砂漠で暮らしている人たちの文化とは基本的には違うんですね。ですから、同じアフリカの中でも、どこに住んでいるかによって日本と比較できるかできないかということの違いが出てくると思います。キクユランドは大陸の中にあって海の近くではないから、そういう意味では日本と違うんですが、でも水に対してとか自然に対して基本的によく似ているところがあるんじゃないかと思います。

もう一つはバントゥの概念にも問題がある。と言うのは、バントゥという概念は言語学者がつくったもので、本当には「バントゥ人」というものはいないんですね。日本で言うなら、ユーラル・アルタイ人という言語学のカテゴリーがあるんですが、だからと言ってそういう一つのまとまった文化のユニットがあり得るのかというと、なかなかそうは言えないでしょう。ただ、バントゥとユーラル・アルタイとを比較するとしたら、そっちのほうが共通項がある。

ケニアのキクユ、あるいはウガンダのバガンダ、南アフリカのコサ、ズールなどを見ると、確かにズール語とキクユ語は全く違う言葉ですが、基本的な文法の構造は非常に似ているところがある。どういうところかと言うと、米山先生も言ったんですが、「ントゥ」という言葉が、魂、スピリットという意味を持っていて、何にでもつくんですね。そういう意味で、日本と非常に似ている。いろいろな神々がいる。石の神とか川の神とか木の神とか、そういういろいろなものが神になるということは確かに共通点で、少なくともバントゥ系の考えと非常に似ているところがあるんじゃないかと思います。

日本の神々のスピリットのことはもっと研究してからでないと発言できないけれども、バントゥでは人間とその他の、例えば犬とか蛇と

かライオンとか木とかでは、それぞれ位が違うんです。これは、先生が名前をお出しになったテンペルの『バントゥ・フィロソフィー』（一九四五年）という本に出てくる分析ですが、それまでアフリカにはフィロソフィーはないんじゃないかという話だったんです。ところがアフリカ人にも哲学が存在するということをこのテンペルが言い出して、彼はバントゥ系民族もバルバ民族も評価した。その本当の目的は、彼らをクリスチャナイズするために、そういうフィロソフィカルなコスモロジカル・フィーリングがあることはいいことだ、そのために評価したに過ぎない、というふうな批判がその後に出ました。ともかく、最初にバントゥのコスモロジーを書いたことは評価しなければなりません。

その後カガメという人が、この人はルワンダ人で、バントゥから見たテンペルを批判しながら書いたんですが、そのレベル分けのことをもっとはっきり書いた。人間、動物、植物というふうに順番がある、とテンペルがしなかったところまで明らかにしたんです。そういう意味では、日本の神々、例えば石の神と人間の神は同じレベルかどうかよくわかりませんが、似たようなアニミズムの中でも、そういう微妙なところに違いはあるんじゃないかというふうに思います。

おもしろい例を紹介しますと、東アフリカに世界的に有名になったアミン大統領という人物がいましたが、隣のタンザニアの大統領はそのアミンを批判するために、スワヒリ語を非常にうまく使っていました。さっき米山先生が説明されたように、「ムントゥ」というと人間のことなんですが、その接頭辞を変えると、評価が変わるんです。「ジトゥ」というふうに言えば、スワヒリ語では同じ「トゥ」が軽蔑語になってしまいます。モンスターというか、怪物というふうな意味もあって、そういうスワヒリ語を聞いた人たちは、アミンのことをはっきりと「こいつはイヌだ」と言われなくても、そのちょっとした微妙な違いでわかったんですよ。

最後に禁忌、例えばお葬式の後はこういうことはしてはいけないというようなことについて言っておきたいと思います。京大の横山先生が『千里エスノロジカル・モノグラフ』の中で、「節用集」を見ると、日本文明においては七という数字は禁忌であったと書いているんです。例えば、子どもが生まれた後とか生理の後には、七日たたないと主人に会ってはいけないとか、そういうことがあったそうです。

これは偶然かもしれないけれども、キクユのタブーの中では七は非常に危険な数字なのです。例えば、一九五二年にケニアではイギリスからの独立戦争が起こって、キクユ人はゲリラ戦争をやったわけです。そのゲリラの誓いの中には必ず七という数字が出てくる。大体ゲリラたちにとって、人を殺すということはポリューテッドになると考えるので、そうした時には何か誓わなければならなかったのです。そういう時に、あることを七回やらねばならないというようなことです。

もう一つ、横山さんが出した例と同じことがケニアのキクユにもあります。それは、もし川を渡ろうとした所に体が損ねられた死体があったとしたら、七日たたないとその辺は渡ってはいけないということになるのです。これはキクユも全く同じです。

私はこれを読んで驚き、なぜ似てるのか、これは偶然なのか、農耕民族だからそういう同じことが存在するのか、いろいろ考えられますが、そういうことがありましたから、バントゥの中でも一つの民族をとりあげて比較したら、もっとおもしろく比較できるんじゃないかというふうに思うわけです。これは批判みたいに聞こえるかもしれませんが、そういうつもりではありません。

芳賀　どうもありがとうございました。

米山さんの論文に対して、日本とアフリカを比較するという場合、そのスケールの違いですね、片方は大きすぎて片方は小さすぎるという、その問題が批判されました。それから、同じようにアニミズムと言っても、ア

フリカと日本ではいろいろニュアンスの違いがあるのではないかということ。しかし禁忌というようなことでは、日本と特に農耕民族のキクユの中には意外な共通性もあるというようなことを、いろいろご指摘くださいました。非常にこれからの議論に役に立つコメントであったと思います。

それでは、まず米山さんに一言。

米山　アフリカ全体と日本を比較するのは乱暴だということは私も初めから承知しておりまして、そういうことは申したんですけれども、今日の私の論は、先ほど申しましたように、西アフリカのマリのバンバラと、熱帯アフリカと言いましょうか、赤道アフリカのバントゥ系の言葉を話すテンボと、それから東アフリカのタンザニア北部のサバンナに住んでいる半農半牧民のイラク、これら三つの民族を割合に詳しく調べて、さらにそれらの共通の部分を取り出して論じております。その意味では、牧畜民と狩猟民は全然違うというふうな話もできるかもしれませんけれども、基本的には共通項だけでひっくくったという意味で、日本文化との比較もかろうじて可能なんじゃないかというふうに強弁をしたいと思います。

芳賀　それでは、ここにご出席の皆さんにいろいろご意見、ご質問いただきたいと思います。

ベフ　非常に素朴な基本的な質問ですが、二つありまして、最初に日本とアフリカを比較なさった理由が、私にはちょっとわからないんです。そういう比較をすることによって、どういう目的を達しようとしていらっしゃるのか。あんまり基本的なことで失礼かもしれませんが。

米山　それを一言でお答えしますと、ここから頼まれたからです。(笑)

ベフ　それはそれでいいんです。では、比較なさって、そこから何を導き出してくるか、どういうことでその比較が有意義になってくるかということですね。これが第二の質問なんですが、ペーパーの（2）のところで「日本は何を誇りにできるか」というふうに問題提議をされています。ですから、それを見ますと、何か日本で誇りになり得るものを、この比較によって探し出そうとしておられるようなんですけれども、どうして日本の誇りになるものを探さなければならないのか、恥になるものを探したっていいじゃないかと思います。

青木さんの発表で「肯定的日本特殊論」というのがございましたけれども、なんかそうした肯定的な日本の特殊論を探し出そうとしてるんじゃないか。そうしますと、私の考えでは、それが日本のナショナリズムに結びつくんじゃないかと考えたりしてしまいまして、ちょっと危険じゃないかと思っているわけです。

その点につきまして、ムアンギさんにももしコメントがございましたらお願いします。

芳賀　米山さんとムアンギさんにはちょっとまとめていただいてから、お答えいただきます。

その前にマセさん、どうぞ。

マセ　とても面白く聞きました。日本とヨーロッパの比較はよくされていますが、それ以外の文化と比較するととても面白いと思います。それで、四つの点についてちょっと質問させていただきます。

一つは、神道のことです。神道はカウンター・レリジョンというふうに先生がおっしゃったことにとても賛成です。外国の概念を使って日本のことを考えるということは、これは本当にカウンターの概念だと思います。しかし、御霊信仰というものは、やはり仏教がないと考えられないものですから、その比較はちょっと難しいと思います。それは特に平安時代のものですね、その前はあんまりわかりませんね。

もう一つは、自然神の崇拝のことです。アフリカのことは恥ずかしいですけれども、よく知りません。しかし、日本の場合は、神道の神々はただ自然の神だとは言えないですね。いろいろな面があるからです。例えば、スサノヲは嵐の神だと言われていますが、本当は自然の神かどうかはっきりわかりません。

もう一つは、最後のところの弥生と縄文のことです。日本人の中の野生的なものは縄文のものだという考えに対しては、私は本当に疑問を持ちます。今の考古学の成果をみると、縄文時代は本当に平和的な時代だったよ

うですね。日本での戦争の始まりは、やはり弥生時代です。狩猟文化と戦いは、よく連想されますが、本当はそうではなかったらしいです。ですから、縄文時代と野生的性格の結び付けに関して、私は疑問を感じます。

それと最後に、文化成立の問題で、日本の古代の国家が成立すると、それで民族の文化が成立するのかという疑問があります。

米山　どうしてアフリカと日本を比較するのかと言われますと、直接的には今度のシンポジウムで諸文化を比較してみようということで、「アフリカやってるんだから、アフリカと比較してください」という注文があったことは間違いないんですが、主体的には、私はアフリカへ行くたびに、やはり日本文化を背負って行くわけですから、比較せざるを得ない局面がしばしばあるわけですね。それで、あそこが似てるとかこのへんが違うとかいう経験をいくつも積み上げてきていると思います。

それと、もう一つの私の主体的な動機としては、やはりアフリカに対するシンパシィみたいなものがあって、アフリカにもちゃんとこういう世界がありますよ、ということを紹介するのが私の責任じゃないか、義務じゃないかというような気持ちがあって、そういう意味で日本と比較することも可能なんではないかというふうに考えたわけです。それが比較をする直接の理由なんです。これまでも既にいくつかの場所で日本とアフリカを比較せざるを得ないことがあって、例えば日本人にとってアフリカとは何かということを書いたり、アフリカの意味を考えることの必要性を主張してるのです。そういう文脈でもって、アフリカと日本文化を非常に大胆に比較することを試みたつもりなんです。

それから、二つ目のコメントはおっしゃる通りでございまして、私は非常にここは肯定的日本特殊論を展開しているわけでありますが、これは実は伏線として、日本とアフリカは同じですよと言いたいわけなんです。そのためのレトリックでございまして・・・。

ベフ　同じようなことはアフリカでも誇りにしていいと・・・。

米山　誇っていいという意味です。私は、アフリカは多神教であることを卑下する必要は全然ないと考えます。それから精霊信仰とか祖先崇拝ということを、非近代的、前近代的というふうに言う必要ないと、そういうことを言いたいんです。

カーシングもそうです。祟りにもいろいろな祟りがあって、その祟りの原因が神様のものか、悪霊のものか、先祖の祟りか、それとも個人的な怨みかというふうなことを判断する人がいるわけですね。そういう状況も、私はむしろポジティブに受け取って、そういう世界があってちっとも構わないじゃないか、それを荒唐無稽な迷信であってぶち壊してしまうべきであるという立場のほうが、問題なんだという気がしてるんです。

芳賀　反近代化。

米山　その限りではね。だけど、例えばイスラム圏やキリスト圏の方からは猛烈に攻撃をくらうかもしれないということは、十分予想した上で申し上げているわけです。

芳賀　しかもそれが二十一世紀にアフリカや日本がサバイブしていくための原動力になるはずだ、だから「守ってしかるべきである」だけじゃなくて、守らなければ二十一世紀に生きながらえることはできないのだ、というところまで言いたいわけですか。

米山　だからますます肯定的日本特殊論になってしまいますけど（笑）。

芳賀　と言うことは、つまり原アフリカ肯定論ですね。

それから、マセさんから四つほど質問がありましたが。

米山　御霊信仰に関しては、御霊信仰そのものは仏教の影響下に成立していることは間違いないわけでありますけれども、そのルーツはひょっとしたらアフリカのウィッチクラフトと同じようなものなのではないかという気がしてるんです。だからカーシングですね。呪い。そういうものが、仏教が入ってきた時点で仏教的な形をとったと考えたらどうかなと思っているんです。そのもとは未分明な形で存在していたんじゃないかというふうに思っているわけなんです。

マセ　文献には出てないですね。

米山　出てないです。そのへんが私どもは文献学者と違いまして、自由なんですね（笑）。

それから自然神のことですが、これはおっしゃった通りです。自然神といっても、木の神様は木だけという意味じゃないし、光の神様というのは光だけではない。それは非常に多面的な意味を内包していることは承知しております。ただ、ここでは自然を対象とする崇拝という一番出発点と言いますか、ベースのところを単純に評価したのです。

芳賀　それから、縄文は攻撃的、弥生は平和的というのは、マセさんは間違いじゃないかとおっしゃっていますが。

米山　これはそうかもしれない。火焔土器の荒々しさとかいうようなことからの、私の独断と偏見かもしれないと、今反省しております。

芳賀　でも、これは割合流通している俗説じゃないですか。

吉田　非常に危険な俗説ですね。

芳賀　じゃあムアンギさん、先の「日本の誇るべきものはつまりアフリカの誇るべきものでもある」という米山さんの根本のテーゼに対して、どうでしょう?

ムアンギ　私も先生にお聞きしたいほうですが、アフリカ人と日本人の共通点を祖霊信仰とか御霊信仰とか精霊信仰というふうにあまり言い過ぎると、逆に危険じゃないかと思います。それよりも、西洋人と日本人、あるいはアフリカ人はそんなに違うんでしょうかね。例えば三年前だったかな、ナンシー・レーガンは呪術みたいなものでレーガンをコントロールしてるという話がありましたが、白人は呪術というようなものを信じてないというふうにみんな言ってるけれど、本当にないのかなと思います。

私はクリスチャンですが、キリスト教だって、例えば毎週日曜日にはイエスの体を食べるとか、イエスの血を飲むというセレモニーがありますね。そのことを考えると、キリスト教の中にも深く見れば祖霊信仰とまでは言わないけれども、それに近い信仰はすごくある。そういう例はいっぱい出せるのじゃないかと私は思います。ですから、「我々は違うんだ」と言うために、そういう神話をつくってるだけであって、実際はみんな同じようなスピリットを持っていると私は思いますね。これは日本とアフリカの話だけじゃなくて、本当のことを言ったら、みんな一緒じゃないでしょうか。これについては西洋人から聞きたいです。

米山先生はこういう比較を頼まれたからやったというふうに言われますが、逆に言ったら、非常にヒューマニスティックな発想だと思います。これは強く繰り返し言わなければいけない。人間はみんな一緒であるということは、非常に人権と関係があることと思います。

リーダー　私が宗教学を勉強した出発点はアフリカの宗教でした。日本の宗教を勉強する前は、アフリカで研究してましたから、アフリカの宗教と日本の宗教を比較することは興味深いと思います。

米山先生はほとんど農耕民族についての話をされましたが、現代のアフリカは遊牧民がだんだん弱くなってますが、昔は遊牧民が多かったでしょう。私はアフリカ遊牧民の宗教構造と農耕民の宗教構造はちょっと違うと思います。例えば遊牧民の宗教構造では、一神教みたいな構造がありました。その面でアフリカの宗教と日本の宗教とでは、ちょっと相違点があると思います。

それから、アフリカの神話では創造神がよく出てくると思います。私が研究していた西アフリカの創造神話では、ほとんど人間と創造神との間で問題が起こる。そしてその場合、創造神がこの世界から退くケースが多く、その時から人間の宗教的な活動はずっと神の許しを求め、神と人間のギャップを縮めるために宗教的犠牲をします。このへんがちょっと日本の宗教と違うと思います。

それから、日本の宗教は人間が神になる文化ではないか。例えば、日本の新宗教には生き神論があるでしょう。でも、アフリカの宗教の基本的構造は人間が神に戻る宗教構造ではないかと思っています。

芳賀　では、先にクラハトさんのご意見をいただいて、それからまとめて米山さんにご返事いただきます。

クラハト　米山先生がこのディスカッションの中でおっしゃったことは、手元にあるテキストの理解のために参考になると思います。でも、最初にこのテキストを読んだ時は、結論のページに強い印象を持ちました。先生はそこで「その意味では、日本人がもっともよく原始的心性を残存させて

きた民族集団であるということが出来るかもしれない」と書いて、その次の結論で、二十一世紀は日本の世紀だと書いておられます。では、どんな世紀になると先生はおっしゃるのか。私はこのテキストは学問のテキストであるよりも、予言者のテキストのように見えます。新国学的予言者のテキストのように思えます（笑）。

先生は日本の文化の最大の特色を精霊、祖霊、御霊信仰と言われました。しかし、私の日本の友人には、精霊、祖霊、御霊信仰を持っている日本人は少ないです。そういう日本人は日本人ではないんですか。非国民的存在ですか（笑）。

先生は、アフリカの場合には「諸文化」という言葉をお使いになりました。「諸文化」というのはおもしろい言葉です。最近の学問においての言葉の使い方としては、ある一つの国に一つの文化というアイディアは少し古いんじゃないですか、一つの国の中にはいろんな文化が同時に存在している訳ですから。したがって、「日本の諸文化」という場合は大丈夫です。そういう諸文化として、私の友人も存在できるんです。

さらに、「万世一系」という言葉をお使いになりました。私は知識が足りないかもしれませんが、この「万世一系」という言葉は大体十九世紀と戦前、戦中の言葉として知っておりますが、どういう意味で先生はこの二十世紀の終わりごろに、「万世一系」という言葉をお使いになるのですか。それは二十一世紀のためのプログラムですか。

最後に、国内政策の問題について、特に学校教育ですが、これから日本の学校教育は、唯物論に対して弥生的、縄文的日本人の復活を進めなければならないとおっしゃるのでしょうか。

芳賀　いろいろと辛辣ないい質問が出ました。

まず、リーダーさんのアフリカ宗教に関する質問に、次にクラハトさんの非常にきわどい指摘にお答えください。

米山　リーダーさんのペザントに偏っているというご指摘は、おっしゃった通りだと思います。ノーマッズのほうは別の世界があると思います。先ほどちょっと言いましたけれども、ハンター・ギャザラーズの場合は、全く別の世界があってもちっとも不思議じゃないと思うんです。私の対象としたのはもっぱら農耕をやってる人たちの世界で、その意味では日本と比較がしやすい人たちだと思います。

リーダー　それは日本とアフリカの比較ではなくて、農民と農民の比較論。そうすれば、農民と農民というように、同じような生活をしている民族を比べたほうがいいでしょう。

米山　同じ生産様式、生活様式の社会、民族集団を比較する、そういうふうに理解していただきたいと思います。だから細かく言えば、アフリカの農耕民の社会と日本の農耕民の社会の比較というふうに理解していただければいいと思います。

それから、人間と創造神との葛藤のなかで、創造神が退いてカオスが出てきて、人間が神を追うようになり、サクリファイスその他が始まっていくというプロセス、これがアフリカの一つのあり方としてある。日本の神話に全く同一のプロセスがあるかどうかというあたりは、少し検討しないとよくわかりませんけれども、違っていてもちっとも構わない、その限りでは。

それから、生き神信仰、人を神に祀る信仰というのは、柳田以来の日本の大きなモチーフの一つなんですけれども、そういうイメージはアフリカにはないかもしれませんが、まだ例外があるかもしれません。　クラハトさんのコメントについては、まず日本人が最もよく原始的心性を残存させている民族集団であるというのは、私のテーゼでありまして、それがけしからんということですね（笑）。

次に二十一世紀の話で予言者にされそうですので、お断りしておきますが、ここは、レトリックとして「よく二十一世紀は日本の世紀であると言われるが」という、例えばハーマン・カーンという未来学者が「そういうことを言っているが」ということを前提にして書いているわけです。私はそれを「二十一世紀はアフリカの世紀であると言いたい」というためのレトリックとしてつけ加えているだけでありまして、私は二十一世紀が日本の世紀であるかどうかはよく知りません。たぶんそうではないだろうと思

います。

それから「万世一系」という言葉は、我々昭和一桁の人間にとっては当たり前の言葉でありまして、要するに天皇家を指しているわけで、天皇家というのはずっと続いているというイメージがつくられて、それが日本の国民文化の中にある時点までは定着していたわけですね。それはもう一九四五年でもって完膚なきまでに粉砕されてしまって、それから後は「万世一系」なんていう言葉は完全に死語になってしまっておりますけれども、私などはまだ覚えておりまして、時々そういう言葉がレトリックの中に出てくるのですが、誤解を招いたとすれば、訂正します。

要するに、リニアリティを大事にしているという意味で、日本人もアフリカの社会も共通性を持っているということです。しかしこれは別に日本やアフリカだけじゃなくて、系譜学と言うんでしょうか、そういうものはアメリカでもどこでもポピュラーなことです。その意味では、「万世一系」という言葉が特に刺激になったとすれば、私の作文の成功だというふうに考えておきます。

それから、弥生的、縄文的教育ということですが、私は唯物論的科学的テキストだけの日本の教科書がもうちょっとほかの何かを教える教科書になっていくために、縄文とか弥生という世界も教えて、その中の意味も教えるようになるといいだろうと言っているだけです。

芳賀　しかし、いずれにしても縄文、弥生だけで日本の歴史を説明するわけには行かないですね。

それからもう一つありました。祖先信仰、精霊信仰、御霊信仰、そういうものを持たない日本人がいくらでもいるのに、あれは非国民なのかという質問です。

米山　これは非常におもしろい観察でありまして、クラハトさんがおつき合いになっている方たちは、たぶん若い中間層の日本人で、都市に住んでいる人たちというふうに想定してよろしいですか。それならば、確かに自分の宗派すら知らない人が非常に増えていることは事実だと思うんです。ちゃんと知っている人ももちろんいますが、知らない人が増えているということは間違いない。その意味では御霊信仰を持ってない人というのは例外的ではなくて、普通の日本人なのかもしれません。ですが、この人たちは昨日リーダーさんがおっしゃってた「テレビ教」のように、別の形でのインテグレーションが起こっていると考えていいのではないかと思います。ですから、昔からの御霊信仰はなくなってきているかもしれないけれども、別の形で御霊的なものが出てきているという可能性もあるし、昔の通りの祖先崇拝はなくなってきているかもしれないけれども、別の形での祖霊信仰みたいなものが出てきているという可能性もあるのではないかと考えています。

吉田　お二人の議論をたいへんおもしろくうかがったんですが、一つだけ米山さんにうかがいたいのですが、日本の精霊や御霊といったいくつかの特徴をお挙げになったのですが、例えば日本が影響を受けた中国あるいは朝鮮あたりのものが私は多々入っていると思います。例えば、中国の道教の信仰では人間が神様になるわけですね。そういう形のものが相当にある。だから、日本の宗教は外からかなりのものを受けた信仰形態であると思います。一方、アフリカは少なくとも自生ではないか、アフリカ大陸の中で純粋培養された形で生まれてきているのではないか。すると、レベルの違うものの比較になっているのではないかということをお尋ねします。

米山　レベルの問題は確かにあると思います。ただ、一番プリミティブな心性、原始的心性というところは、中国、朝鮮も含めて古代心性みたいなものがイメージとしてあったと考えれば、その限りでは自生的なアフリカと比較できるのではないかと思います。

吉田　ただ、そうした御霊あるいは精霊信仰が今では単純化されてしまいまして、安易に日本の歴史を論ずるタームとして用いるのは、私は少し危ないと思っているのです。先ほど御霊信仰は仏教だとおっしゃいましたが、その通りですが、それでは仏教の何と日本の原始的なもののどれがミックスしたのか、そうしたことがまだはっきりしていないのに、意外にこれが単純に使われている。それは弥生と縄文も同じことであって、ちょっと注意を呼びおこしたいのです。